

(資料 12 高橋博子 仮訳)

Control: 11063

Rec'd: December 27, 1954

2:28 a.m.

From : 東京

To: 国務省

No.1502、12月27日 2.p.m.

私は今朝、重光 [葵] に最初の公式電話をした。

地元の外交世界では先輩の大使たちへの彼の対応は、新聞では通常の儀礼上の電話として扱われるが、私との約束については昨日この国の新聞に大きな見出しで掲載され、今日は英字紙で第一面の記事となった。外務省によってカメラマンが立ち会うよう手配され、約 10 分間の私たちの会談の終わりには、外務省と私たちや彼らの事務局の写真と映像が撮られた。

重光は約 45 分間私を引き留め、米日関係の全領域について、私たちは率直に議論した。会談の初めには、外務大臣 [重光] は、彼曰く非公式の資料として判断されるべきとするタイプされたメモを手渡した。しかしながら、アメリカとの協力についての第 1 段落と第 2 段落の声明は、彼の固い公式な意志として考えるべきであると述べた。この資料の第一段落は、「首相の代理としてまた同時に外務大臣の立場として、アメリカ合衆国との十分に可能なかぎりの協力政策を力強く求めるとことを意図していますし、そのために、私は可能なかぎりのあなたの助けを信頼しています」と述べた。重光は最近英語で話す機会がないため誤解がないように、彼の考えを文書に書いておきたいと思ったのだと説明した。相互に利益のある関係を最大限発展させるということを行ったあと、その文書は「私たちの側では、既存の協定のもとで、我々に課された立場を満たすよう我々の防衛対策を真剣に遂行しましょう」と述べていた。外務大臣は、このことをなすためには政府は世論の支持が必要で、政府がこの支持を得るために米国の支持が必要なのだと続けた。この資料は日本政府が緊急で早めの解決を要すると考えている 6 つの問題のリストで締めくくられていた。

それらは、

1. ビキニ補償問題の解決
2. 占領地救済政府基金 (GARIOA) の解決
3. 1953 年の MSA の第 550 条に基づいて円基金を創設
4. 公共法第 480 のもとでの合意の達成
5. 共同防衛支出への日本の貢献への合意
6. 大規模な戦犯の解放と仮出所、「この問題を解決することで、米国政府の役割に対して日本人々が好意的な態度とらせ、ほかの政府の関心事である行動の面で、われわれの関係改善に向けて実質的に貢献するであろう。

この文書は、東南アジアの経済発展へと踏み入れるという米国の計画に、日本政府は深い関心をもって

いる、という言葉で締めくくった。この資料は、日本政府はいまやこの問題を研究し、この研究の成果は、米国政府にとって有益であることを証明するであろうと述べていた。

上述の問題の中で唯一外務大臣が扱っているのはビキニ補償の問題である。私が以前に谷に述べたように、私は彼に、米国が 150 万ドル支払うという基準で解決する用意をしていると言った。私はまた、もしこれで満足できないようであれば、少し増額する議論の用意があるが、さらなる増額は議会による承認がされねばならないであろうし、かなりの遅れを引き起こすであろうし、議定では望ましくない議論になる可能性がある。重光は、彼がこの合計額で合意できると思っていた 200 万ドルまで上げることは可能なのかどうかと聞いた。私はこれは約束できないが、彼がこの合計額を受け入れるであろうことを明確に示すのであれば、私はこのことをワシントンに照会するでしょう。重光は、次の数日間に直接かもしくは谷を通じて私と連絡するでしょうが、200 万ドル以下は受け入れられないことは確実だと述べた。重光が内閣全体の承認を得られるとはっきりさせるならば、今 200 万ドルを提供するということへの許可を得られれば、この新政権と我々の関係にとってもっとも有益であると信じます。

資料に挙げられているほかの問題に関して、重光は、私が他の問題についても全ての問題についても谷と自由に議論してくださいと言った。そして彼は、最近始まった(EMBTTEL1479)非公式で近しく個人的な谷との交際を続けることを望むと述べた。重光は個人的にはいつも諸問題を私と議論しますが、首相の代理としての二重の役割の視点から、彼は目下余りにも時間が取られているから、私が谷と話をするのが事態を進展させるでしょうと述べた。他には完全に信頼があり、外務省にすべての問題に対して話すことができる述べた。

私は防衛予算問題、ビキニ補償、そして GARIOA について議論した短い非公式の覚書を大臣に残した。防衛予算に関しては、私は口頭で、日本政府は、自らの防衛への貢献を少し増やすだけであるが安定させていることは非常に重要だと強調した。重光はこの事の重要性について感謝し、現在の時点では困難であることを強調した。彼は現政権として選挙の前に防衛予算について固い約束をすることは、(彼の言葉では)選挙民の意志とはなっておらず、不可能だと述べた。しかし、とりわけ防衛問題を判断してきた内閣の委員会と、予備的な議論が開催されることは有益であることに同意した。このグループは外務大臣、防衛庁長官、財務大臣、経済産業大臣、経済評議会議長から構成される。ラドフォード海軍大将がいるときに、私はこれらすべての紳士を招いて、ハル元帥と日本での陸海軍の司令官と対外活動本部長、大使館上級官僚とともに、昼食会を開催した。重光はこの会合やそれに続くハル元帥や大使館との会合で、私たちが率直に遠慮なくこれらの官僚と話をするよう望んでいると述べた。重光は全体的な問題を彼自身理解しているが、他の大臣たちの何人かはかなりの勉強が必要だと思うと述べた。

会談の最後で、私は現政権の共産圏への態度について質問した。私は、彼や首相がおこなったさまざまな公式声明に注目していること、また岸や谷からこの問題について非公式の補償を受けて喜んでいるのであるが、私としては外相の個人的な反応を知りたいのだと述べた。重光は、共産中国を水密区画室に締め出さないという日本の世論の観点からもそのことは最も重要であるし、日本人の旅行や貿易制限を緩和する現政権の声明の目的や行動は、彼ら自身が状況がどうなのかを知るためなのだと述べた。

日本人がもっとも重要なアジアの隣人と考えるところとどのような接触もできないという、米国を非難する反アメリカ世論を無効にするのに貢献するように感じると述べた。重光はとても厳粛で明らかに誠実

な物腰で、政府の側には、米国との絆を弱めるという意図は決してなく、それどころか、政府は可能な限りこの絆を強めることを望んでいるのだと述べた。重光は続けて、共産圏との関係を正式なものにしたり公式に後援する具体的な計画はなく、彼はこのための公式な対策については知らないと続けた。しかしながら、政府が共産中国との関係を正式なものにする（正常化する）ための具体的計画を考えている時には、日本政府はまず米国に相談するのだとはっきりと述べた。

私は外務大臣に、彼の心のこもった挨拶と率直な議論に感謝し、私もわれわれの国のあいだの絆が強まることを望んでいると述べた。彼の覚書にある特別の項目に関しては、私は谷氏と近日中にそれらを喜んで議論しますと述べた。写真家が入ってきて、会談は終わった。

アリソン

出典：From Tokyo To Secretary of State, December 27, 1954, File: Japan General 1951-54, Division of Biology and Medicine, Entry 326-73, Box12, Record of Atomic Energy Commission, Record Group326, National Archives at College Park, College Park, Maryland.

(資料 1 3 高橋博子仮訳)

抜き取りのお知らせ

RG326 (米原子力委員会)

Tab#: 25

Entry 73

一部/5/シークレット級

Box12

閲覧制限

下記に該当する項目はこのファイルから抜き取られています

ファイル名：日本 一般 1951年—54年

資料日付：1954年12月28日

本ファイルの検証で、閲覧制限の理由でこの項目は移管された。公文書館の資料の制限は、検証が可能なように、一般的なまたは特別なレコードグループの制限声明で述べられている。上記に該当する項目は次のものを含むため抜き取られている：

X 安全保障上の機密情報

抜き取り：1996年9月27日 by：ハミルトン

NND：968161

情報公開請求検索番号 968161 00012 00025